

多賀の国の物語 4

多賀の始まり

多賀大社編 1

「お伊勢参らば、お多賀へ参れ」

多賀大社は、天照大神の親神を祀る神社として広く信仰を集めています。

しかし、始めから日本全国から参詣者を集める神社だったわけではなさそうです。

多賀大社の神様は、多賀の地に降り立った神様。

どうして多賀に

それは判りません。

しかし、多賀大社の神様のルーツを探ると

多賀の神様が持っている「多賀の地を守る神」の姿が見えてきます。

それは多賀の地を潤す水を司る神様の姿。

多賀を守る神様は徐々に神威を高め、

日本を守る力を発揮し、今に至っています。

まず、多賀の神様が降り立った山から、その歩みを辿ることにしましょう。



多賀の神様が降り立った 杉坂峠の神木杉

鈴鹿の山に源を発する芹川。その流域から鈴鹿山地を望むと、多賀の里から立ち上がる美しい山並みを見ることができます。この山、よく見ると山の裏側に抜ける道が、山壁を縫うように走り、山と山の間が峠道になっているように見えます。ここが杉という集落に入る杉坂峠。その山が杉坂山。その杉山峠の斜面に、梢が見えます。麓から見上げてそれと判るほどですから、かなりの巨木と見受けられます。

実は、杉坂山こそが、多賀の神様が最初に降り立った処とされているのです。社伝に依れば“昔、伊邪那岐大神^{いざなぎのおおかみ}がここに降り立ち一休みしていると老人が現れ神に粟の御飯を差し上げた。神は喜んでこれを食べ終えると、箸をを地面に突き刺した。すると箸はみるみる杉の大木に成長した。これが御神木杉である”と伝えています。

山道を登り、杉坂峠に至ると、そこには息を呑むような光景が待っています。途中で枝分かれをした巨大な杉の木が屹立しているのです。この杉こそが多賀大社の御神木である「杉坂山の御神木杉」です。この杉の梢は、遠く琵琶湖の湖上からも見ることができます。と、いうことは、この杉の木から多賀の里は元より、琵琶湖までも眺望することができるということです。確かに、杉坂峠からの景色は絶景です。人々の暮らしが足下に広がっているのを見おろすことができます。ここから見える景色こそが、多賀の神様の視線です。

多賀の神様は、この山に宿る神で、その依代として神木杉がありました。神様はこの木に宿り、見える範囲の里と湖に恵みを与えます。そして、これを仰ぐ人々は、「あそこに里を見守り、恵みを与える神が宿る」と感じ、ここに登拝し、神に感謝という祈りを捧げました。これが多賀の神様に対する祈りの始まりです。

現在でも、8月に行われる多賀大社の万灯祭の際には、この御神木の元で浄火がきり出され、大社に運ばれます。まさに神様の里への降臨です。



神木杉



神木杉



神木杉



神木杉遠望



調宮神社鳥居



調宮神社

ととのみや

調宮神社

山に降り立った神が麓に招かれた

河内の風穴に向かう道が一円^{いちえん}の里を過ぎ、栗栖^{くるす}にはいると山が両側から迫る芹川峡谷へと入って行きます。栗栖に入ってまもなく、芹川左岸から流れ込む谷があり、ここに美しい橋が架り、そのもとに神社の鳥居が見えます。

杉坂山に降り立った多賀の神様は、やがて麓に招かれます。神様の恵みをより身近に、さらに、常時受け取りたい、と願う人達の気持ちで、遠く険しい山上に宿っていた神様を、里の暮らしの近くに招き、日常的な祈りを捧げるようになったのです。山上にいらっしゃった神様は、御神木に宿っていましたので家はありません。しかし、麓に神様をお招きすると、神様の家が必要になります。そこで神様のために神社が造られ、ここに神様に住んで頂くことにしました。これが調宮神社です。

現在でも、多賀大社の最大の祭りである「多賀まつり」では、多賀大社で隊列を整えた一行は調宮神社に向い、ここで祭典を行った後、多賀大社に戻り、様々な神事を繰り返します。これは、現在の多賀大社の神様が、元々は杉坂山から調宮神社に移られたという歴史を表現しているのだとされています。

多賀の神様が里に降る 芹川の用水

栗栖の山裾まで招かれた多賀の神様ですが、芹川の流域に住む人達は、もっと身近に、そしてもっと日常的に神様の恵みを得たいと願うようになります。神様の恵みとは何か？それは、山が生みだし、芹川をつくり、そして里に流れて田畑を潤す水の恵みです。しかし、水は決して上には流れません。芹川の水を田畑に水を引こうとすると、かなり上流に堰を造り、ここで水を取り、用水路を刻み、下流に水を運ぶ必要があります。

調宮神社は、杉坂山の谷水が芹川に合流するところに鎮座しています。川の合流点は、川の力が強くなる聖地と認識されていたから、ここに神様が招かれたのは理にかなっています。そして、調宮神社のすぐ上流を見るとここには堰が設けられ、水が取られ、神社のすぐ横を用水路が通り、多賀の里に向かって流れ降っているのが判ります。調宮神社は、芹川の水を配る神様だったのです。とするならば、調宮神社から招かれた多賀大社の神様もまた、芹川の水に本源を持つ神様と言うことになります。

多賀の神様は、調宮神社で芹川の用水に乗り、多賀の里に降り、多賀大社の壮大な社殿に招かれ、ここに鎮座することになります。



芹川の水を取る



調宮神社の横を流れる芹川用水

水の神様を祀る

多賀大社奥書院庭園

杉坂山に降臨し、神木杉に宿った多賀の神様は、麓の調宮神社に招かれ、芹川の水を司る神となり、さらに、用水に乗り多賀の里に迎えられ現在に至っています。この神様の渡御の有様から見れば、多賀の神様の本源が、生き物の命にとって最も必要な水、多賀の場合は芹川の水にあったことが判ります。では壮大な多賀大社、その中に「水の神様」という神威が読み取れるでしょうか。

多賀大社には、豊臣秀吉の寄進による奥書院と、これに伴う庭園が伝えられています。庭園の起源は、水の神様を祀る祭場を様々に荘厳したことに始まるとされていますが、この多賀大社奥書院の庭園はどうでしょう。庭園は、中世末から流行した蓬莱式の庭園で、書院に面した池と、これを取り巻く築山、さらに雅趣豊かな景石と紅葉を始めとした植栽からなっています。池を良く見ると、池水は背後を流れる川から引き込まれ、さらに川岸も景石により荘厳されています。そして、川を遡ると、何と、この川は、芹川の用水そのものなのです。そう、奥書院の庭園は、芹川用水を祀る祭場だったのです。多賀大社の神様が見守る芹川の水は境内を出ると水田に入り、豊かな稔りを約束します。



奥書院庭園



後ろの石組が太田川を荘厳している

